

プログラム

一、寄席入門・下座解説
よせにゆうもん げざかいせつ

二、落語 蝶花楼桃花

三、上方落語 笑福亭鶴光

～お仲入り(休憩)～

四、色物 三増紋之助 《曲じき》

五、落語 柳家さん喬



やなぎや さんきょう
柳家さん喬



みすず もんのすけ
三増紋之助



しょうふくてい かつらこ
笑福亭鶴光



ちょうかうろうももか
蝶花楼桃花



下座解説の様子

～生徒の皆さんへ、お願いとお知らせ～

- 公演中の他の生徒さんとの私語はつつしんでください。
- 当日の生徒さん個人による写真撮影はお断り申し上げます。
- 携帯電話、アラーム付き時計等をお持ちの生徒さんは、開演前にあらかじめスイッチをお切りください。



紙切り作：三代目 林家正楽

2025年6月11日(水)
宇都宮市民文化会館

寄席入門 寄席演芸をご鑑賞いただく前に・・・

寄席（よせ）とは

落語を軸とした演芸が演じられる場所。現在でも東京・大阪を中心に点在し、年中無休で興行しています。

落語とは

落語の原点と考えられるのは、室町時代・戦国時代に武将に仕えた「伽衆（おとぎしゅう）」という存在です。彼等は娯楽の少なかった当時、世情などを機知に富んだ巧みな話術で、おもしろおかしく人々に聞かせていました。代表的な人物には京都誓願寺の法主、安楽庵策伝和尚や豊臣秀吉に仕えた曾呂利新左衛門などがいます。その後、群雄割拠の戦乱時代には大きな発展がみられず、天下が治まる江戸時代まで時代が経過します。天下太平の江戸時代には様々な芸能を育む機運が熟し、落語もその一つとして勃興します。この頃から落語を職業とする露の五郎兵衛などが登場し、さらには江戸の鹿野武左衛門や大阪の米沢彦八らに継承され、その土台が定着するのです。そして江戸末期から明治時代において三遊亭円朝がそれまでの落語を集大成し、近代落語の基礎を作り上げます。その後、それまでの変遷と同じ様に、その時代の風俗、世情を吸収し、幅広い層に親しまれる大衆芸能として日本人の心に生きづいてきたのです。

■ 噺の種類

笑いに主眼をおいた「滑稽噺」が主流ですが、その他に涙を誘う「人情噺」、芝居がかった「芝居噺」、さらに「怪談噺」など様々です。

■ 小道具

使われる小道具は扇子と手拭いだけです。これらを色々なものに見立て落語の演出効果として利用します。



■ 江戸落語と上方落語《落語の東西での違い》

江戸落語は商家や武家の座敷に呼ばれて演じるという「座敷噺」の形で発達したため、じっくりと聴かせる噺が多くあります。一方、上方落語は盛り場の辻で、行き交う人を呼び止めて演じた「辻噺」を起源とするため、にぎやかな噺が中心になります。

上方落語だけに使われる道具に“見台・小拍子・膝隠し”というものがあります。小さな机・拍子木・衝立のようなもので、演者の前に置きます。必ずしも全ての上方の噺家が用いるわけではありませんが、上方特有の舞台装置です。上方の噺は動きが盛んなものが多く、演者の裾が乱れるので、それをお客様に見せないために考案されたといわれています。また小拍子で見台をたたき、その音を場面転換に用いるなど、演出の要素もあります。

江戸と上方で演じられる噺の内容は、共通するものが多く存在しますが、「時そば」（江戸）⇔「時うどん」（上方）のように名称や噺の筋が異なる演目もあります。

色物（いろもの）とは

寄席で演じられる落語・講談以外の演芸の総称。曲芸、奇術、漫才、紙切り、コントなど、分かりやすく肩の張らないレパートリーの数々は、寄席興行には欠かせない存在で、落語のような伝統芸とは一線を画します。「落語や講談と区別するため、出番表に赤字で記した」「番組の彩りになるから」などが語源と言われる。

寄席の BGM「下座音楽」

お囃子の三味線や笛、前座の太鼓など、寄席の BGM 全般の総称。一般的には三味線・太鼓・笛・鉦（かね）などで構成されており、演者が登場する際の出囃子の他、噺の演出として、情景や自然音などをイメージしたハメモノといわれる演奏が入ることもあります。また、寄席では下記のように、開場時、終演時に叩かれる太鼓の演奏があります。

一番太鼓：開演の約 30 分前に叩き、「どんどんドント来い」と大太鼓だけでゆっくりと打ちます。また打ち始める前に、太鼓の周りを、バチでカラカラと音を立てて回しますが、この音は寄席の木戸を開ける音を象徴しています。

二番太鼓：大太鼓・シメ太鼓・笛によって、「お多福来い来い」とにぎやかに演奏されます。

追い出し太鼓：終演時に大太鼓だけで「出て行け出て行け（失礼ながら…）」と聞こえるように叩きます。



東京・新宿にある寄席「末廣亭」の舞台

